海國兵談序

今之所謂兵也者言用兵之理今之所謂武備也者備之之事是也兵之屬於理備之屬於事時勢使然耳所謂武備也者攻守之具則亡論已至乎其測區域廣狹山河險易古今異同人物强弱天度寒暄敵國大小遠近緩急利不利衰旺各從其權而制其宜徐謀豫虞必無有遺漏也而後其用爰備焉不啻是也豫虞匪懈講習之務益久益精研究周致無所不至雄武俠烈之風不撓則夫夫無有反心外慴伏而莫或敢犯其如此而以至萬々世使人民永莫受兵革亂離之苦者也可得而期矣業亦大也哉矣凡兵爲臨時機備爲太平時武備不張則兵無所講兵理不明則武備無所張事理相待而已矣我神祖開業以來昇平既久中外無事也之言兵者唯理之究卒無所施今也實國家備于武之時哉而今之備之者徒談其理而不按其方牽乎舊儀而忽乎講

習流風漸移因循苟且其終歸廢弛使兵之與武備均屬空理可勝嘆耶亦猶兵革亂離間人懈于文學時勢使然耳兵爲臨時機備爲太平業太平時止備爲屬于事舍事取理未見其可雖時勢之使然也自非大勉强斷而不能及于此也予林子平者慷慨之士也情恬憺寡慾心存大義其親族略多縉紳子平蔑視不爲家酷好跋涉凡邦域內經歷殆偏其自處常如在兵革間藍縷糲食草行露宿陶々而自適云嘗憤然發志困學有年著書滿架皆言當世之策此編名曰海國兵談其意以爲我國海國也要在備於海冦故以目焉其論說高實激切如目覩其人傍採海外奇策古今來未嘗見聞者出之足觀我國防禦之大方其所志可謂偉矣當今之世豫虞匪懈講習之益久益精研究周致無所不至則所謂以至萬々世使人民永莫兵革亂離之苦者其在乎斯歟其在乎斯歟

天明丙午夏五月念六　　仙臺　工藤球卿撰

海國兵談自序

海國とは何の謂ぞ、曰地續の隣國無くして四方皆海に沿へる國を謂ふなり、然るに海國には海國相當の武備ありて、唐山の軍書及日本にて古今傳授する、諸流の說と品變はれるなり、此譯を知らされは日本の武術とは言難し、先海國は外冦の來り易き譯あり、亦來り難き謂れもあり、其來り易しと云ふは、軍艦に乘して順風を得は、日本道二三百里の海も一二日に走り來るなり、如此來り易き譯ある故、此備を設けされは叶はさる事なり、亦來り難しと云ふ謂れは、四方皆大海の險ある故、妄りに來り得さる也、然れとも其險を恃んて備に怠る事勿れ、是に付けて思へは日本の武備は外冦を防く術を知る事差當て急務なるへし、偖外冦を防くの術は、水戰にあり、水戰の要は大銃にあり、此二つを能く調度す

る事日本武備の正味にして、唐山韃靼等の山國と、軍政の異なる所なり、之を知て然して後陸戰の事に及ふへし、惜哉大江匡房を始めとして、楠正成甲越二子の如き、世に軍の名人と稱するも、其根元唐山の軍書を宗として稽古ありし人々なれは、皆唐山流の軍理のみ傳授して、海國の義に及へる人なし、是れ其一を知て其二を知らさるに似たり、今小子海國兵談を作て、水戰を以て開卷第一義に述ふ、是海國の武備根本なるか故なり、日本の武備は此水戰を第一として、其上に又一つの心得あり、其心得と云ふは古の唐山今の唐山と、地勢人情共に相違したる譯なり、先づ日本開闢以來外國より來り襲ひし事は、唐の元の時代度々軍を仕懸しなり、就中弘安四年には、大軍にて押來りしかとも、幸に神風に逢つて靈せられたり、是元君は北種より、出て唐山を押領したるなれは、元の代は唐山と北狄と一體に成て、北邊の軍止み果てたり、

然る故に遠く兵馬を出すにも、後に心碍りなかりし故、度々軍を仕懸く、是に付て唐山の時勢を考見るへし、三代は云ふに及はず秦漢迄は日本の廣狹竝に海路等の事、詳に知り得さりしなり、唐の代には屢々日本と往來して、海路國郡等まて詳かに知りたれとも、互に好み深かりし故侵し襲ふに及はず宋に至りては其朝の風儀懦弱なりし故、是又來り得さりしなり、扨宋を滅したる者は北種の蒙古にして即ち元なり、元の兵馬度々日本へ來りし事は、前に言ひし如く唐山北狄一體に成て、其境目の軍止みたる故、遠く兵馬を出しても後の心碍りなき故也、其後明の世祖先を滅して、唐山を再興し其政事柔弱ならす、能く一統の業を成しけり、此代に日本を侵略するの議ありと雖、北種の大敵日々月々に襲ひ懸りし故、遠く海を渉りて來るに違なし、其上大閣の權威朝鮮を陷れて北京へ入るへき勢に辟易して、侵し伐つき隙なかりし

間に、又韃靼に亡されて、唐熙以來唐山韃靼又一體に成りて今は愈々能く一統し、北邊愈能く大平に成れり、此故に遠く兵馬を出すにも、後の心碍りなく、其上康熙、雍正、乾隆の三主各文武剛敵にして能く時勢に達し、能く唐山を手に附けたり、必明までの唐山と思ふ事なかれ、先今の清を以て、古の唐山に較れは、土地も古の唐山に一倍し、武藝も北風を傳へて能く修練し、人情も北習を承て剛强に移り行きし故、終に北狄貪賂の心根、次第に唐山に推移りて、其仁厚の風儀も漸くに消滅し、且又世々の書籍も、次第に精しく成り行き、又日本と往來も繁く、其上人心日々月々に發明すれは、今は唐山にて日本の海路國郡等も、微細に知得たり、竊かに憶へは若くは此以後、清主無内患の時に乘し且古業を思ひ合せて、如何なる無主意を起す間敷にもあらす、其時に至りては貪慾を本とすれは、日本の仁政にも懷くべかず、又兵馬億萬の多きを

恃めは、日本の武威にも畏るべからず是明迄の唐山と同しからさる譯なり、又此頃歐羅巴の莫斯哥(ムスコウ)末亞(ヒヤ)其勢ひ無双にして、遠くの韃靼の北地を侵掠し、此比は室韋(シイ)の地方を略して、東の限り加(カ)莫西葛杜加(ムシカツトカ)即ちカムサスカ蝦夷の東北にあり より東には、此の上取るへき國もなし、此故に又西に顧みて蝦夷の東なる、千島を手に入るへき機ありと聞及へり、既に明和辛卯の年、莫斯哥末亞より加莫西葛杜加へ遣し置ける、豪傑「バロンマオリツツ」「アラアダルハン、ルベンゴロウ」といふ、者加莫西葛杜加より船を發して、日本へ押渡り、港々へ下繩して、其深さを計りなから、日本を過半乘廻したる事あり、就中土佐の國に於ては、日本國に在合、阿蘭陀人へと認めし書を遣はし置たる事もあるなり、是等の事は其意根可憎可恐、これ海國なるか故に來る間敷船も、乘人の機轉次第にて心易く來らるるなり、察すへし、さて海國の譯と唐山時勢とを辨し得たる上は、又一

つの心得あり、其心得と云ふは、偏武に不陷して、文武兩全なるへき事を欲し願ふへし、偏武なれは野也、元より兵は凶器なり、然れとも死生存亡の係る所にして、國の大事は是に過るものなき故、野にして無智なる偏武の輩に任せ難き事也、此故に日本の古代は、都に皷吹司と淳和奬學の兩院を置き、國々には軍團と鄕學とを置て、皆文武を教へられたり、又孔子も文武兩全の意を述へて在文事者有武備矣と宣へり、其外黄石公は、文武相竝て國家を經濟すへき趣を述へ、司馬穰苴は、治世に戰を不忘は國家を保護するの道なる事をいへり、其外には晉の六卿、齊の管仲、漢の二祖、蜀の孔明、我神祖の如き皆兩全の旨を會得したる人々也、其餘兵を談する人和漢數多あれとも、皆各其長する所のみ傳授して一方ききの兵家なれは、兩全といふへからす、且又戰國の道各國主の模儀あり、其大概を論する時は日本は其軍立小拵合なり、血戰を

主として謀慮少なし、只國土自然の勇氣に任せ、命を捨て敵を碎く事を第一の戰法とする故、其鋒先は鋭なれとも、法あしき故持重の位を爲し難し、唐山は理と法とを重んして謀計多く、持重を第一義とする故其軍立は堂々たれとも血戰に至りては甚た鈍し、是等の事は日本、唐山兩國の軍記を讀て味へは其鋭鈍は知るへし、是寛永の比澁田八右衞門、濱田彌兵衞等只九人臺灣へ押渡て、阿蘭陀の「セネラル」城代のことを擒にしたる例もあり、又安永中小子肥前の鎭臺舘に遊事したりし比、崎陽の在舘、唐人六十一人徒黨して亂をなしたる時、吾黨十五人鎭臺の令を承けて相向ひ、卽時に六十一人を討破り、其楯籠りたる工神堂を毀て歸れり、此時唐山人と手詰の勝負を爲して、彼國人の力戰に鈍き事を親ら試み知れり、又歐羅巴の諸國は大小の火器を專らとして、其外飛道具甚た多し、尤も艦船の制、妙に精くして船軍に長したり、特に其國

妙法在て能く治めて和親する故、同國攻討事なく、只相互に他州を侵掠して、己れか有とすることを世々の勤として、決して同國中にて同士軍をせさるなり、是日本唐山等の全く及はさる所なり、兵を提る者、此の軍情を能く會得して、臨機應變せは天下に横行すへし、抑も日本海國の譯と、今の清(カラ)(唐の代號)古の唐山に優りし故、日本に於て油斷なり難き譯と、三州各戰鬪の模儀に別あるの三說は、日本前兵家の未た發せさる所なり、其未た發せさる譯は、世々の軍學先生皆唐山の書に基きて工夫を附けし故、自然に唐山流に陷て、却て海國は海國の兵制ある事を發明せさる故なるべし、今小子始てこれを言ひしは、深く患ふる所有りて廣く問ひ、切に考へて此旨を得たりといへども、尋常の世人は口外すへからす、口外すへからさるは謹肅なれはなり、小子は直情徑行の獨夫なる故、敢て忌諱を不顧、因て「ベンゴロウ」か事を始として、都

て外冠の來り易き譯を有りのままに出して、却て海國肝要の武備は如此也といふ事を、肉食の人々に知らしめんと欲する故、見聞する所を纂集して此書を作爲す、これ吾が小子德を不量、位を不計して憂ふるに海國を以てする所以也、是れ併しなから小子僭踰也、罪を不遁事を知る、然れども人をは不可取、言をば可取、是小子德と位置と不量計、此書を作爲して言を當世に危する所也、而して書成て以て躬ら珍とす、然れとも小子不才也、文獻不足、此故に字々句を不成、句々章を不成、觀者讀法に苦しむへきことを恐る、然りと雖初學の士端を此に開て、文を以て戰法を潤色し、武を以て文華を助け開くの趣を會得し、文武相兼て其精に至る事を得は、卽邦家を安んし海國を保護する一助なるへし、竊に是を日本武備志と言ふとも罪なけんと、只其文の拙を以て其意を害する事無からん事を希ふ而已、時天明六年丙午夏